

麦の需給に関する見通し

平成 3 0 年 3 月

農林水産省

目 次

麦の需給に関する見通し

麦の需給に関する見通しの策定の考え方	1
1-1 食糧用小麦の総需要量	1
1-2 国内産食糧用小麦の流通量	2
1-3 米粉用国内産米の流通量	3
1-4 外国産食糧用小麦の需要量	4
1-5 外国産食糧用小麦の備蓄目標数量	4
1-6 外国産食糧用小麦の輸入量（政府からの販売数量）	4
2-1 食糧用大麦及びはだか麦の総需要量	5
2-2 国内産食糧用大麦及びはだか麦の流通量	6
2-3 外国産食糧用大麦及びはだか麦の需要量	7
2-4 外国産食糧用大麦及びはだか麦の輸入量（政府からの販売数量）	7

【麦の需給に関する見通しの策定について】

主要食糧の需給及び価格の安定に関する法律（平成6年法律第113号）第41条に基づき、農林水産大臣は、麦の需給及び価格の安定を図るため、毎年3月31日までに、麦の需要量、生産量、輸入量、在庫量等に関する事項を内容とする「麦の需給に関する見通し」を定めることとなっています。

麦の需給に関する見通し

麦の需給に関する見通しの策定の考え方

麦の需給については、国内産麦では量的又は質的に満たせない需要分について、国家貿易により外国産麦を計画的に輸入することとしています。

平成30年度の麦の需給に関する見通しについては、近年の総需要量や国内産麦の流通量の実績等を踏まえ、以下のとおりとします。

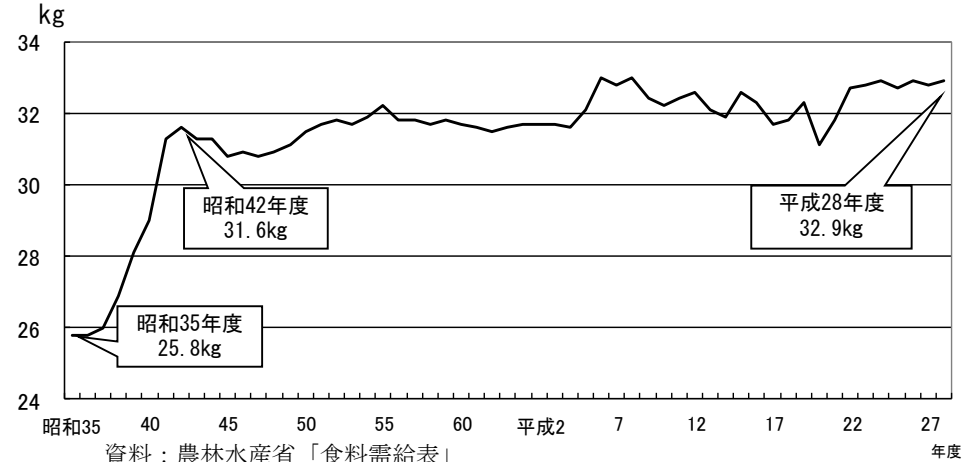
1-1 食糧用小麦の総需要量

近年、食糧用小麦の1人当たりの年間消費量は、概ね31～33kgで安定的に推移しており（図1）、総人口についても近年やや減少に転じているものの、ここ数年では大きな変動は見られません。

このため、食糧用小麦の総需要量^(注)は、短期的な変動はあるものの中期的には安定していることから、平成30年度の食糧用小麦の総需要量は、過去7か年（平成23年度から平成29年度まで）の平均総需要量である573万トンと見通します（表1）。

(注) 食糧用小麦の総需要量は、国内産食糧用小麦の流通量及び政府からの外国産食糧用小麦の販売数量の合計から実需者（製粉企業等）の在庫数量の増減分を勘案し算出（以下同じ。）。

図1 食糧用小麦の消費量の推移（1人1年当たり）



資料：農林水産省「食料需給表」

注：平成28年度の数値は概算値である。

表1 食糧用小麦の総需要量の推移

(単位：万トン)

年度	総需要量	対前年度比
平成23	537	97%
24	576	107%
25	574	100%
26	577	100%
27	580	101%
28	581	100%
29見込み	586	101%

30年度見通し
573万トン
(過去7か年平均)

1-2 国内産食糧用小麦の流通量

(1) 国内産食糧用小麦の供給量（当年産の小麦のうち、生産者から実需者に引き渡される数量）

平成30年産の国内産食糧用小麦の供給量（注1）は、平成29年8月の民間流通連絡協議会において報告された平成30年産の作付予定面積（207千ha）に、過去5か年（平成25年産から平成29年産まで）の10a当たりの収量のうち、最高及び最低を除いた3か年の平均値（404kg）を乗じ、さらに、食糧用供給割合（97.7%）（注2）を乗じて、82万トンと見通します（表2）。

（注1）は種前契約に基づき、生産者から実需者に引き渡される数量である。

（注2）当年産のうち、食糧用として生産者から実需者に引き渡される割合（それ以外は、種子用、規格外等）。平成30年産については、過去5か年（平成25年産から平成29年産まで）のうち、最高及び最低を除いた3か年の平均値である。

(2) 国内産食糧用小麦の流通量（前年産と当年産の食糧用小麦のうち、当年度内に市場に流通する量）

平成30年度の国内産食糧用小麦の流通量は、平成30年産の国内産食糧用小麦の供給量に、年度内供給比率（注3）を乗じ、さらに、平成29年産国内産食糧用小麦の在庫量を加えて、83万トンと見通します（表2）。

（注3）当年産の供給量のうち、当年度内に生産者から実需者に引き渡される数量の割合。平成29年産については、実需者から提出された平成29年産麦の購入計画から算出し、平成30年産については、前年産と同数としている。

表2 国内産食糧用小麦の流通量の推移

（単位：万トン）

年産	食糧用小麦の供給量 ①	うち年度内供給量 ②	年度内供給比率 ②/①	次年度繰越（在庫） ①-②
平成25	77	28	36.9%	48
26	81	33	40.8%	48
27	95	27	28.5%	68
28	73	27	36.5%	47
29見込み	84	36	42.3%	49
30見通し	82	35	42.3%	↓
30年度流通量見通し				83

注：四捨五入の関係で、計と内訳が一致しないことがある。

1-3 米粉用国内産米の流通量

需要者からの聞き取りによれば、米粉用米の平成28年度需要量の実績は2.3万トンとなっています。また、平成29年産の計画生産数量は、前年産の1.9万トンから大幅に増加し、2.8万トンとなっています。

このような生産量増加の要因としては、昨年3月に公表した「米粉の用途別基準」及び「米粉製品の普及のための表示に関するガイドライン」が需要を喚起していること等が挙げられ、民間では活発な商品開発等の動きが見られます。また、JFOODO（日本食品海外プロモーションセンター）等、グルテンフリー食品需要が拡大傾向にある欧米等での日本産米粉市場獲得に向けた取組も始まっています。

平成30年産米粉用米の生産量は、直近の需要トレンドを勘案し、3.3万トンと見通します。

その上で、持越在庫を含めた米粉用米の今後の年度ごとの出回りの見通しは、需要が拡大傾向にあることに鑑み、需要者からの聞き取りを参考とすることとし、平成30年度の流通量については、平成28年産以前の米粉用米在庫使用量が0.9万トン、平成29年産の次年度以降繰越（在庫）が1.7万トン、平成30年産の年度内供給量が0.5万トンの計3.1万トンと見通します（表3）。

表3 米粉用国内産米の流通量の推移

（単位：万トン）

年 産	米粉用米の供給量 ①	年度内出回り比率 ②	米粉用米の年度内供給量 ①×②	次年度以降繰越（在庫）
平成28年産以前の米粉用米在庫使用量				0.9
29	2.8	15%	0.4	2.4 30年度：1.7 31年度：0.7
30見通し	3.3	15%	0.5	2.8
30年度流通量見通し				3.1

注1）平成29年産米粉用米の供給量は計画生産数量。

注2）年度内出回り比率及び次年度以降繰越（在庫）からの供給量は、需要者聞き取りを踏まえ算出したものである。

1-4 外国産食糧用小麦の需要量

平成30年度の外国産食糧用小麦の需要量は、同年度の食糧用小麦の総需要量573万トンから国内産食糧用小麦流通量83万トン及び米粉用国内産米流通量3万トンを差し引いて487万トンと見通します（表4）。

1-5 外国産食糧用小麦の備蓄目標数量

現在、不測の事態に備え、国全体として外国産食糧用小麦の需要量の2.3か月分の備蓄を行っています。

このため、平成30年度の備蓄目標は、93万トンとします（表4）。

なお、民間の実需者が2.3か月分を備蓄する場合、そのうち1.8か月分について、国が保管料を助成します。

1-6 外国産食糧用小麦の輸入量（政府からの販売数量）

平成30年度の外国産食糧用小麦の輸入量は、外国産食糧用小麦の需要量に備蓄数量の増減分を加えた487万トンと見通します（表4）。

なお、飼料用小麦の輸入については、別途、農林水産大臣が定める飼料需給計画に基づき行います。

表4 平成30年度の食糧用小麦の需給に関する見通し

（単位：万トン）

総需要量		A	573
国内産	国内産食糧用小麦の流通量	B	83
	米粉用国内産米供給量	C	3
	計	$D = B + C$	86
外国産食糧用小麦の需要量		$E = A - D$	487
外国産食糧用小麦の備蓄数量			
	29年度（見込み）	a	93
	30年度（目標）	b	93
	増減	$F = b - a$	▲0
外国産食糧用小麦の輸入量（政府からの販売数量）		$G = E + F$	487

注：四捨五入の関係で、計と内訳が一致しないことがある。

2-1 食糧用大麦及びはだか麦の総需要量

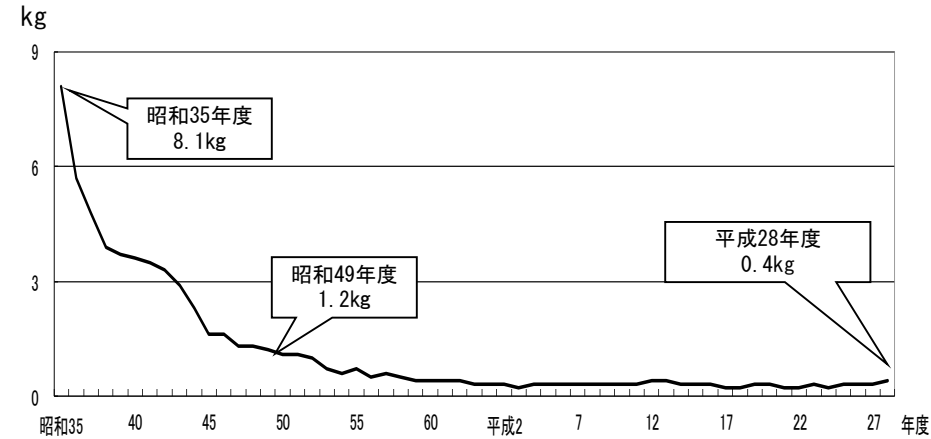
近年、食糧用大麦及びはだか麦の1人当たりの年間消費量は、概ね0.2～0.4kgで安定的に推移しており（図2）、総人口についても近年やや減少に転じているものの、ここ数年では大きな変動は見られません。

他方、平成28年度以降、健康志向等を背景に大麦及びはだか麦への需要が増加傾向にあります。実際に、はだか麦の輸入量が平成28年度及び平成29年度にそれぞれ約1万トンずつ増加しており、特に、水溶性食物繊維（大麦β-グルカン）が豊富なもち性はだか麦の輸入量が増加するなど、過去のトレンドとは異なる動きもみられるところで、ヒアリングによれば、平成30年度も平成29年度と同様高水準になる見込みです。

このため、平成30年度の食糧用大麦及びはだか麦の総需要量^{（注）}については、中期的な動向をベースとしつつ、足元の動きを的確に反映する観点から、過去7か年（平成23年度から平成29年度まで）の平均総需要量に、増加したはだか麦の輸入量（約2万トン）を加え、34万トンと見通します（表5）。

（注）食糧用大麦及びはだか麦の総需要量は、国内産食糧用大麦及びはだか麦の流通量並びに政府からの外国産食糧用大麦及びはだか麦の販売数量の合計から、実需者（精麦企業等）の在庫数量の増減分を勘案し算出。ただし、生産者団体とビール会社との契約栽培により供給される国内産ビール大麦は含まない（以下同じ。）。

図2 食糧用大麦及びはだか麦の消費量の推移（1人1年当たり）



資料：農林水産省「食料需給表」

注：平成28年度の数値は概算値である。

表5 食糧用大麦及びはだか麦の総需要量の推移

（単位：万トン）

年度	総需要量	対前年度比
平成23	31	96%
24	33	105%
25	32	98%
26	33	101%
27	33	100%
28	34	104%
29見込み	35	104%

30年度見通し
34万トン

過去7か年平均
(33万トン)
+
はだか麦の
輸入増加分
(2万トン)

注：四捨五入の関係で、計と内訳が一致しないことがある。

2-2 国内産食糧用大麦及びはだか麦の流通量

(1) 国内産食糧用大麦及びはだか麦の供給量（当年産の大麦及びはだか麦のうち、生産者から実需者に引き渡される数量）

平成30年産の国内産食糧用大麦及びはだか麦の供給量（注1）は、平成29年8月の民間流通連絡協議会において報告された平成30年産の作付予定面積（二条大麦30千ha、六条大麦17千ha、はだか麦4千ha）に、過去5か年（平成25年産から平成29年産まで）の10a当たりの収量のうち、最高及び最低を除いた3か年の平均値（二条大麦298kg、六条大麦288kg、はだか麦250kg）を乗じ、さらに、食糧用供給割合（二条大麦55.6%、六条大麦91.4%、はだか麦95.2%）（注2）を乗じて、11万トンと見通します（表6）。

（注1）は種前契約に基づき、生産者から実需者に引き渡される数量である。

（注2）当年産のうち、食糧用として生産者から実需者に引き渡される割合（それ以外は、ビール用、種子用、規格外等）。平成30年産については、過去5か年（平成25年産から平成29年産まで）のうち、最高及び最低を除いた3か年の平均値である。

(2) 国内産食糧用大麦及びはだか麦の流通量（前年産と当年産の食糧用大麦及びはだか麦のうち、当年度内に市場に流通する量）

平成30年度の国内産食糧用大麦及びはだか麦の流通量は、平成30年産の国内産食糧用大麦及びはだか麦の供給量に、年度内供給比率（注3）を乗じ、さらに、平成29年産国内産食糧用大麦及びはだか麦の在庫量を加えて、11万トンと見通します（表6）。

（注3）当年産の供給量のうち、当年度内に生産者から実需者に引き渡される数量の割合。平成29年産について、実需者から提出された平成29年産麦の購入計画から算出し、平成30年産については、前年産と同数としている。

表6 国内産食糧用大麦及びはだか麦の流通量の推移

（単位：万トン）

年産	食糧用大麦及びはだか麦の供給量 ①	うち年度内供給量 ②	年度内供給比率 ②/①	次年度繰越（在庫） ①-②
平成25	11	4	35.2%	7
26	10	3	31.1%	7
27	10	3	25.2%	8
28	9	3	30.4%	6
29見込み	11	4	37.7%	7
30見通し	11	4	37.7%	↓
30年度流通量見通し				11

注：1）国内産食糧用大麦及びはだか麦については、上記の流通量11万トンのほかに生産者団体とビール会社との契約栽培により国内産ビール大麦6万トンが供給される見込みである。

2）四捨五入の関係で、計と内訳が一致しないことがある。

2-3 外国産食糧用大麦及びはだか麦の需要量

平成30年度の外国産食糧用大麦及びはだか麦の需要量は、同年度の食糧用大麦及びはだか麦の総需要量34万トンから国内産食糧用大麦及びはだか麦の流通量11万トンを差し引いて24万トンと見通します（表7）。

2-4 外国産食糧用大麦及びはだか麦の輸入量（政府からの販売数量）

平成30年度の外国産食糧用大麦及びはだか麦の輸入量は、外国産食糧用大麦及びはだか麦の需要量と同量の24万トンと見通します（表7）。

なお、飼料用大麦の輸入については、別途、農林水産大臣が定める飼料需給計画に基づき行います。

表7 平成30年度の食糧用大麦及びはだか麦の需給に関する見通し

（単位：万トン）

総需要量	A	34
国内産食糧用大麦及びはだか麦の流通量	B	11
外国産食糧用大麦及びはだか麦の需要量	$C = A - B$	24
外国産食糧用大麦及びはだか麦の輸入量（政府からの販売数量）	$D = C$	24

注：四捨五入の関係で、計と内訳が一致しないことがある。